

俳句雑誌



空

令和2年5月31日発行

第18巻2号

通巻第90号



2020・5

SORA 90号

五十句【一】

柴田 佐知子

春がすみ水を豊かに村滅ぶ

やはらかき胸を反らして囁れり

野のうねり柵のうねりや金鳳華

戦ひにゆく凧天へ放ちけり

春風やかがめば子供のころの畦

涅槃図の薄れうすれて遊ぶごと

垂直に指を差し入れ雛を出す

夜遊びの隨身戻る雛の間

一灯もなき雛の間の恐ろしき

葉脈の空に広がる仏生会

猫の子の抗ふ脚を突つ張つて

儉約の果ての遊蕩春の雪

梵鐘の中は淵なり夕桜

大地揺れゐる花吹雪に立てば
堰越えてまた漫ろなる花筏
灯のついてより錯乱の花の山
守られてゐるは退屈サイネリア
樹間飛ぶ梟は闇動かさず
忘るるを懼るる母に毛布足す
奪ひ去る音となりゆく雪解川
呉服屋の巻く反物に春來たる
浮き氷水を押さへてゐたりけり

―「俳句」七月号より―

卵割る囀の窓すこし開け
指の棘まづ春光にさし出して
枝移る鳥の脚見えあたたかし
御開帳またさんざんに燃さるる
大試験窓に大きな雲流れ
野遊びの輪に殉教の海の音
弓なりの渚へ返す桜貝
夕顔を蒔く会へぬ日にやや慣れて
切株の更に焦げゆく野焼かな

福岡 高倉 和子

鉄棒の水より冷えてみたりけり

着ぶくれて面倒なこと言ひ出せり

魚市場すみずみ洗ひ年詰る

末席を取り合ひ座る忘年会

泣いてゐる横顔のあり爛熱し

声張れば母に似てくる追儼かな

鷹鳩と化し幼子に追はれけり

かざす手を見てゐるのみの春焚火

東京 中田 みなみ

手庇を廻して春を広げたり

天窓も開けて迎ふる匂ひ鳥

お涅槃日鯉口開けて集り来

鯉の口花びら吐けり不味いらし

花舞ふや亀にもありし薄暎

園丁が水車を止めに夕ざくら

胃の重し枝の先まで蘇枋咲き

駅の花時計代りに吹雪きけり

長崎 荒井 千佐代

夏立つやコップにもある水平線

夜の薔薇卓の柾目の美しき

絵硝子に主の血の色や麦の秋

どの坂も海より生まれ花朱戀

夜の弥撒へ南風の海坂のぼり切り

花みかん日々の飽食罪に似て

髪洗ふ身裡の水を傾けて

銀漢の支流のひとつ被爆川

埼玉 服部 早苗

太箸やひかりの中の一家族

初夢や翼をひろげ山を越え

盃を呑む獅子頭より手の出でて

鳥総松空を大きく撮しけり

七種の名札いきいき草書体

女正月笑うてのぞく大白歯

おきあがりこほし
不倒翁机に冬深む

愛の日や仏へ洋酒チョコレート

北九州 深川淑枝

依代の男松女松や飾米

松籟のひびく山空白飾る

年棚の鏡に風の翳はしり

福藁の束切る鎌に野のひかり

田遊のあと山鳴りの統ぶる村

野施行を争ひて鳥羽こぼす

久女忌や山の日ためて砧石

風折れの枝口白し久女の忌

福岡 角野良生

一服も脚立の上や松手入

ところ得るまじごとんべりの転ぢらこぼす

根性の塊として山の芋

水音も崩れてをりぬ崩れ築

鴟の贅啗へなほして突き刺せる

もう繕はぬ蜘蛛の囿となりにけり

初めての口紅さやに七五三

松はみな玄海を負ひ冬を待つ

広島 戸栗末廣

短日の手相見に声掛けられし

本通りの裸木姿勢正したる

梅田発つとき短日と思ひけり

米櫃に一合の升去年今年

少年のきれいな歯ぐき日脚伸び

きさらぎの山へ山へと送電塔

宮島に一月の望上りけり

水仙の波打つてゐる斜面かな

福岡 山本則男

夜神楽のふるまひ酒は茶碗酒
 神楽果て櫓のゆつくり崩れゆく
 帰らざるものへ供ふる寒の水
 容赦なく波に打たるる和布刈禰宜
 使ひ切る水の広さやかいつぶり

粕屋 秋 千 晴

重箱の蒔絵合はせて初座敷
 病床の母も紅ひくお元日
 絵双六折目のテープも色褪せし
 雨の中鳥の声する七草粥
 鏡割庖丁の背に布を当て

大阪 井上和子

光秀の丹波篠山初霞
 釣瓶より新玉の水ほとぼしる
 ひらがなの名前ひとしほ祝箸
 恵方かな鹿の糞など踏みゆくも
 風花や手の煎餅に鹿の息

福岡 あさなが捷

トラックより牛引き出され金鳳花
 矢印に列曲がりゆく遍路かな
 壺焼を浦の説でさし出さる
 うららかや日がな干し箆動かされ
 綿雲の溶けて海月となりにけり

須恵 苑 実 耶

初鶏の声に勝れるややの声
 獅子舞の囃むより先に泣く子かな
 面取れば更に強面鬼は外
 内裏雛向かひ合はせに納めけり
 手を取られ舟に乗り込む桃の花

福岡 秋 津 令

竹馬の高さ違へてやつて来る
 大寒や血を吸ひ上ぐる注射針
 質問の怒号に変はる二月かな
 待春や昨夜と変はらぬ母の息
 病棟の灯は消えて春満月

熊本 松 田 明 子

早々に灯を落としたる鶴の宿
 一陣よりたちまち千羽万羽鶴
 双眼鏡持つ手に息を鶴倶楽部
 ぼる市や杵を添へたる白ひとつ
 ぼる市を抜けて代官屋敷かな

岡垣 田 中 と し 江

出初式玄界灘の青々と
 初御空大漁旗のはためけり
 出刃の峯叩く軍手や河豚料る
 道空けて通す芸妓や初戎
 揃ひ来て枝膨らます初雀